平成30年　年頭にあたって

校　長　藤井　和彦

平成30年節目の年が明けました。本年もどうぞよろしくお願いいたします。

1月9日の始業式、インフルエンザ等の影響もあって全校児童が一堂に会しての始業とはなりませんでしたが、冬休みを終えて久しぶりに元気な子供達に再会することができました。

さて、今や新春の風物詩ともいえる「箱根駅伝」が今年も行われ、数々の名場面やドラマが生みだされました。とりわけ、復路10区を走った順天堂大学4年生の花沢賢人君にとっては、選手として出場できることが奇跡ともいえる最後のレースとなりました。花沢選手は大会終了後、「沿道から絶え間なく耳に飛び込んでくる激励の声を受け、これだけの声援を送られて走ったのは人生初めてだった。とても楽しかった。」と語ったそうです。

千葉・八千代松陰高時に、5千メートルで超高校級とされる13分台をマークして同大に進学したものの、2年時に骨と靱帯（じんたい）の接合部で炎症が起こる難病「強直（きょうちょく）性脊椎炎」を発症しました。治療法も確立されていない難病で「陸上をやめようか」と何度も自問自答したそうです。

踏みとどまらせたのは仲間の存在でした。主将の栃木ら同級生に「一度は一緒に箱根を走ろう。」と励まされ、弱気を振り払い、心を奮い立たせました。季節の変わり目に腰の痛みが増すため、箱根をあきらめかけた昨秋は、「俺だってみんなと走りたいんだ。」と練習に食らいつき、念願の出場を勝ち取りました。

大会当日は次年度のシード権を獲得できる10位と1分4秒差でスタート。「後輩にシード権を」と果敢に攻め、わずか14秒届かず11位に終わりはしましたが、目指す「逃げる選択肢を捨てろ」を体現して、チームと全国のファンに感動を与えました。

病は完治していないものの、「走るのは楽しく、卒業後は実業団の駅伝選手を目指します。」という。病と困難に打ち勝ち、箱根を走ったランナーは、また新しい喜びを見つけようとしています。

新たな年を迎え、子供達には、自分の夢や希望を持って、仲間とともにあきらめず何事にも挑戦し続け、自己実現を果たしてほしいものです。